

10th International Phycological Congress に参加して

大沼 亮

第10回国際藻類学会議 (10th International Phycological Congress) は、2013年8月4日～10日に、アメリカ合衆国フロリダ州オーランドの Renaissance Orlando at SeaWorld というホテルを会場として開催されました。本大会は 'Algae in a Changing World' というサブタイトルが掲げられ、めまぐるしい環境変化の中に生きる藻類の役割の重要性について再認識しようという包括的なテーマのもとに行われました。この大会では、4つのプレナリーレクチャーが開かれたほか、数多くの口頭発表は12のシンポジウム、25のオーラルセッションに分野ごとにまとめられて行われ、またポスターセッションには130題を超える発表が寄せられました。日本からは30名弱の参加者がいらっしやいました。

私は国内学会の参加経験はありますが、国際学会には参加したことがなく、しかも初めてのアメリカです。不安でいっぱいだったのですが、指導教員である堀口健雄先生が後押ししてくださり、これまでの自分の研究の総まとめのつもりで学会に臨もうと心に決めました。今回のポスターは120cm×120cmのボードに収まるサイズで作成するようにということで、私の経験した学会のポスターよりはだいぶ大きいサイズです。総まとめのつもりで作ったので（不安を払拭しようという理由もあったのですが）、規定のサイズギリギリのポスターにデータを詰め込めるだけ詰め込みました。ポスターが完成する頃には「よし！やってやるぞ！」という気持ちになることができました。ちなみに私のポスターは、盗葉緑体をもつ渦鞭毛藻類の比較微細構造観察と系統学的研究について報告したものでした。

いよいよ出発の日、早朝の集合に眠い目をこすりながら空港へ。行きは新千歳空港から成田、ボストン、オーランドという順番で降り立ったのですが、慣れない長時間のフライトのおかげで、オーランドに着く頃には腰痛と寝不足に悩まされました。オーランドについて頃にはすっかり夜になっていましたが、夏のフロリダは日本の本州さながらの湿度と気温で、北海道にすっかり慣れてしまった私からすると、文字通りうだるような暑さでした。オーランド空港から学会が開催されるホテルへはバスで移動したのですが、その車中で、学会に参加される外国の方とお会いして、いよいよ学会に参加するんだという気分が現実味を帯びてきました。オーランドはリゾート地なので、バスからの景色は大きなホテルが特に目をひき、これから滞在するホテルの想像で心が浮き立ちました。案の定、会場となったホテルは驚くほど豪華でしたし、巨大なアトリウム内で過剰なほど効いているクーラーにも驚かされました。

大会初日。まずはメイン会場でオープニングセレモニーが

開かれました。いよいよ国際藻類学会の幕開けです。とても大きな会場だったのですが、参加者でその会場いっぱいになるぐらいでした。それもそのはず、本大会には各国から360名以上が参加されたとのことでした。私はその会場の光景を目にしてとんでもないところに来てしまったと身がすくんでしまいました。その後のレセプションでは、初めての国際交流にどぎまぎしましたが、日本人の研究者も多く、海外の研究者の方も気さくに話しかけてくださったので、まずは安心して大会の幕開けを迎えられました。

2日目からは学会発表が始まります。本大会のスケジュールは朝一番にプレナリーレクチャーがあり、その後に各会場テーマごとのシンポジウムやオーラルセッションが行われ、セッション終了後にポスターセッションなどのイベントが催されるという流れでした。この日は朝早くからメイン会場で海藻の環境ストレス応答に関するプレナリーレクチャーがあり、その後、ランチとコーヒーブレイクをはさみつつ4つのシンポジウムと10のオーラルセッションが行われました。私は 'Algal Tree of Life' と題されたシンポジウムと 'Genomics 1' というオーラルセッションなどを聴講しました。'Genomics 1' で行われた口頭発表は藻類の葉緑体ゲノムを読んで種間で比較するといった内容が多かったのですが、私のあまり触れたことのない分野だけにとっても刺激的で、もし私の研究に遺伝子を使った実験を取り入れたらどのように展開できるだろうという想像で胸が踊りました。

3日目のプレナリーレクチャーはNASAのL. J. Rothschild氏のご講演で、生物はどれほどの極限環境に棲むことができるかという観点から、ユーモアを混じえながら講演され、とても興味深いお話を頂きました。この日のシンポジウム、オーラルセッションがすべて終了した後、偶数番の



ポスターセッション

ポスターセッションが始まりました。いよいよ私のポスター発表の本番です。私は極度の上がり症で、ましてや国際学会での発表です。私は緊張し過ぎて居ても立ってもいられず、開始前にはポスター発表のリハーサルをブツブツ口にしながからホテル内をうろついておりました。そのおかげもあってか、ポスターセッションが始まる頃には緊張をほぐすことができ、普段よりもリラックスして発表に臨むことができました。ポスターセッション自体は、これまた初めての経験でしたが、お酒を片手に発表を聴けるような非常にフランクな場となっていました。発表を聴いてくださった方から「Interesting!」とお言葉を頂いたり、質問に受け答えしながら議論をしたりしていくうち、「ああ、研究をやっている本当によかったな」と改めて実感することができました。この日はエキサイトし過ぎの頭痛のため、早く就寝しましたが、この後にアメリカ藻類学会の主催で行われた藻類グッズのオークションでも会場は大いに盛り上がったそうです。

4日目は会場ではワークショップが開かれていましたが、私は Mid-Congress Excursion に参加しました。オーランドにある会場からバスで1時間弱ほどのところにあるケネディ国際宇宙センターの見学ツアーです。移動のバスの中で宇宙センターについての説明があったのですが、発表が終わって肩の荷が下りたせいもあり、心躍らせて説明を聴いていました。宇宙センターでは、ロケットの模型や宇宙服の展示を見たり、宇宙での作業を疑似体験できるシアターに行ったりと、(私にとって)めまぐるしく進む学会から離れて一息つくことができる一日となりました。

5日目は通常のスケジュールに戻り、引き続き発表が行われました。この日の発表で特に印象に残っているのが、私の研究材料である渦鞭毛藻が関係する 'Chromista' のオーラルセッションです。中でも Royal Botanic Garden Edinburgh の D. G. Mann 氏が発表なさった、珪藻の殻がどのように形成されるかという研究は、非常に精緻な観察に基づいたもので、大変感銘を受けました。この日は奇数番号のポスターセッションが行われましたが、私はお酒を片手に聴衆として参加し、今度はポスターセッションの雰囲気をつくり味わうことができました。ポスターの前でも、設置されたテーブルでも、会場のあらゆるところで参加者が楽しそうに議論しており、フランクな雰囲気の良さを実感しました。

6日目は大会の最終日です。この日のプレナリーレクチャーは Rutgers University の O. M. Schofield 氏の講演で、海洋中を様々なセンサーを搭載したミサイル型のロボットを泳がせることで、その場にいるプランクトン相をマッピングする



バンケット

画期的な技術についてのお話を頂き、このような技術が洗練されていけば、藻類学者の仕事がだんだん減っていったのではないかと杞憂しました。すべての発表終了後、クロージングセレモニーが開かれ、そこでは参加者の皆さんの顔が心なしか満足気に見えました。そして緊張のオーラルセッション、ポスターセッション各賞の発表です。幸いにして私の発表が Microalgae 部門の Papenfuss 賞をいただくことができました。まさか呼ばれると思っていなかったのも、その後動悸が収まりませんでした。しばらくして受賞の喜びとともに次なる研究へのやる気がひしひしとわき上がってきました。その後はバンケットが行われ、豪華な料理と美しい演奏に参加の方々皆さん笑顔で談笑していました。宴もたけなわになると、国際藻類学会恒例であるらしいダンスパーティーとなり、名だたる藻類学者が楽しそうに踊る姿は、論文で見るその方々の偉大さと自分との距離を少しだけ縮めてくれたような気がしました。

今回の国際藻類学会に参加して海外の藻類研究事情を垣間見たり、あまり触れたことのない分野の発表を聴いたり、海外の研究者の方々と交流したりと私にとって非常に刺激的で有意義な体験ができました。また、発表を聴いてくださった方々のお褒めの言葉やご助言を頂き、今後の研究のモチベーションがより一層高まりました。ただ、私の英語力のせいで海外の方と思うように交流できず、今後、英語をきちんと勉強しなければならないと心に決めたきっかけをくれた大会でもありました。

第11回国際藻類学会議はポーランドのシュチェチン (Szczecin) で開かれます。ポーランドでは今回の反省と経験を活かして大会に参加したいと思います。ポーランド大会では今回の大会以上に刺激的な大会になること、より多くの研究者の方々と交流できることを楽しみにしております。

(北海道大学理学院自然史科学専攻)